コーカサスの禿鷹

豊島与志雄

一

コーカサスに、一匹の大きな禿鷹（はげたか）がいました。仲間の者達と一緒に、高い山の頂（いただき）に住んで、小鳥を取って食べたり、麓（ふもと）の方へ下りてきて、死んだ獣（けもの）の肉をあさったりしていましたが、ある時ふと、ひょんな考えを起こしました。

「自分は仲間の誰よりも、体が大きく、力が強く、知恵もあるので、みんなから尊敬されている。そこで一つ奮発（ふんぱつ）して、みんなよりも立派な住居（すまい）をこしらえて、王様然（ぜん）と構（かま）えこんでいなくちゃなるまい」

そして彼はいろいろ考えた末、国中の一番高い山の頂に、立派な岩屋を探して、そこに住居を定めようとしました。

ところがいよいよとなると、どれが国中で一番高い山か、さらに見当がつきませんでした。一番高そうな山の上に立って、四方を見渡しますと、向こうの山の方がもっと高そうに思われますし、その山の上へ飛んでゆくと、また向こうにもっと高そうな山が見えます。そしてあちらこちらと、山から山へ飛び移ってるうちに、体が疲れてくるし、気持ちはいらいらしてくるし、どれが一番高い山だかさっぱりわからなくなりました。

「こんなじゃとてもわかりっこない。誰かに聞かなくちゃ駄目(だめ)だ。そこで、禿鷹(はげたか)のことなら俺達(おれたち)禿鷹が一番よく知ってるし、山のことなら山自身が一番よく知ってるはずだから……」

そう思いついて彼は、ある山のうえに飛んでいって、大きな岩の上にとまって、山の霊(れい)にたずねてみました。

「もしもし、ちょっとおたずねしますが、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

すると、岩の中の方から大きな声がしました。

「俺だ」

禿鷹はびっくりしました。これが国中で一番高い山

だったのかしら、と思ってあたりを見渡しますと、どうも向こうの山の方が高そうな気がします。それでなおも一つの山の霊に聞いてみたくなって、向こうの山へ飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

すると、その山の霊が岩の中から答えました。

「俺だ」

禿鷹はまたびっくりしました。そして、も一つ他の山にたずねてみようと思って、その方へ飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどの山でしょうか」

「俺だ」

そこで禿鷹はなお迷いました。そして方々の山へ行ってはたずねましたが、どの山もみな国中で一番高いのは俺だというのです。

さあ禿鷹は困ってしまいました。山自身に聞いてもわからないとすれば……。その時ふと彼は、山の神のことを思いつきました。国中の山の霊を支配してる山の神に聞けば、きっとわかるにちがいない。「だが……まてよ」と禿鷹は考えました。「国中で一番高い山に巣を作りたいなどと、明らさまに言えば、山の神は俺を生意気だと思って、教えてくれないかも知れない。

これは一つだまかして聞く方がよさそうだ」
彼は一人うなずいてから、山間（さんかん）の森の中に山の神を訪（おとず）れました。
「いつも御機嫌よろしゅうて、結構でございます」
禿鷹が丁寧（ていねい）に御辞儀（おじぎ）をするのに、山の神は大様（おうよう）にうなずいてみせました。
「うむ　そして［＃「うむ　そして」はママ］お前のような者がわしの所へ来たのは、何の用か」
「はい、私共は山の上に住んでおりますので、山については何一つ知らないことはありません。がただ一つ、国中でどれが一番高い山だか、それがわからないで

困っております。私共にとっては、山は言わば自分の家でありまして、国中で一番高い山は、自分の家の一番貴（とうと）い所でありますから、汚さないように大事にしたいと思っておりますが、さてどれが一番高い山だかわからないのです。山の霊に聞いたらわかるかと思って、一々たずねて廻りましたが、どの山の霊もひどくいばりやで、みんな自分が一番高い山だと申します。それで……」

「ああそのことで来たのか」と山の神は言いました。

「山の霊（れい）達はみなそんなにいばっているのか。よろしい、わしがよく言いきかしておいてやる」

「はい、どうぞお願いいたします。そして……」
「いやもうよい。山の霊達にはすぐわしが言いきかしてやるから」
禿鷹（はげたか）は初め、山の神から一番高い山を聞き出すつもりでしたが、話がそんなふうになって、とうとう聞きそびれてしまいました。けれども、山の霊達がいばりさえしなければ、山の霊達から聞き出せるにちがいない、と禿鷹は考えて帰ってゆきました。

二

翌日になると、禿鷹は高い山の上へ飛んでいって、その山の霊にたずねました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

岩の中から山の霊が答えました。

「向こうのだ」

禿鷹は向こうの山に飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

「向こうのだ」

禿鷹は向こうの山に飛んでゆきました。しかしその山の霊も一番高い山は向こうのだと答えます。そんなふうにして、禿鷹（はげたか）はまた方々飛び廻りましたが、どれ

一つ自分が一番高いと言う山はありませんでした。

「これは困った。山の神に言われれたとみえて、どの山もへりくだってばかりいて、向こうのだ。向こうのだ……と言うんじゃあ、いくら聞いてもわかりっこない。そうだ、も一度山の神の所に行ってみよう」

そこで禿鷹は、山の神の所へ飛んで行きました。

「昨日はありがとうございました。おかげで山の霊（れい）達は少しもいばらなくなりました。けれど困ったことには、みんなへりくだってばかりいて、どれが一番高い山ですかと聞いても、向こうのだ、向こうのだと答えるきりです。それでどうか、も一度お骨折（ほねお）り下すって、

いばりもしなければへりくだりもしないように、よく言いきかして下さいませんでしょうか。そうでなければ、どれが一番高い山だか、私共は聞き出すことが出来ませんから」

「よろしい」と山の神は言いました。「お前の言う通りに言いきかしておいてやろう。どの山が一番高いか、わしから教えてやってもよいが、今まで山の霊達にたずねたのだから、やはり山の霊達に聞くがよい。山の霊達には、お前の望み通りわしが言いきかしておいてやる」

「どうぞお願いします」

そして禿鷹は喜んで帰ってゆきました。

三

さて翌日になると禿鷹（はげたか）は、こんどこそは大丈夫だと思って、威勢（いせい）よく、飛んでゆきました。

「もしもし、国中で一番高い山はどれですか」

するとその山の霊（れい）は、いばりもしなければへりくだりもしないで、岩の中から冷（ひやや）かに答えました。

「どれだか知らない」

禿鷹は当（あて）がはずれました。それでもなお、方々の山

へ行って、一々たずねてみましたがどの山の霊もみな、どれだか知らない、と同じ冷かな答えをするきりです。

そうなると禿鷹も、山の霊達から聞き出すことはあきらめるほかはありません。それかって、山の神へまた何とか頼みに行くのもしゃくです。はて何かよい工夫(くふう)はあるまいかと、一晩中考えた末、思いついたのは雷(らい)の神のことでした。

「雷の神なら一番高い山を知っているはずだ。がただ聞いたんでは、俺(おれ)の受持ちじゃないと言って教えてくれないかも知れない。これは一つ、雷の神の気短(きみじ)かなのにつけこんで、工夫をめぐらすに限る」

四

禿鷹は翌日、思案（しあん）を定めて、雷の神の岩屋へやって行きました。

「今日はよいお天気のようですが、お休みになるのですか」

「そんなことを聞いてどうするのだ」と雷（らい）の神は破鐘（われがね）のような声で言いました。

「いえ、どうもいたしませんが　いつも［＃「いたしませんが　いつも」はママ］あなたが低い所でばかり雷を

鳴らしていらっしゃるので、お疲れになったのじゃないかとおもいまして、へへへ」と禿鷹（はげたか）は変な笑い方をしました。

「何だ、低い所でばかり雷を鳴らしてるから疲れる……」

「私共から見ますと、あなたが低い平地の上にばかり雷を鳴らしていらっしゃるのが、意気地（いくじ）ないような、おかしいような気がします　私共のような［＃「気がします　私共のような」はママ］鳥でさえ、高い山の上を飛び廻ってるのですもの、あなたも一つ奮発（ふんぱつ）して、国中で一番高い山の上に雷を落としてみられたら、いかが

なものでしょう。それともあなたは、そんなに高い所へは昇れないとおっしゃるのですか」

気の短い雷の神は、それを聞いてもうむかっ腹を立てて、いきなり立ち上がりました。

「よし、それではこれから、国中で一番高い山の上に、大空の上から雷を落としてみせるぞ」

「それは結構でございますな。謹(つつし)んで拝見(はいけん)いたしましょう」

雷の神がうまく策略(さくりゃく)にのったので、禿鷹はしめたと思って微笑(ほほえ)みました。雷が落ちるのを見定(みさだ)めれば、どれが一番高い山だかすぐにわかるし、またそれで、

今まで嘘をついた山の霊を、罰するわけにもなるのです。

五

そこで禿鷹（はげたか）は、ある高い山の上に飛び上がって、その頂（いただき）の岩の影から、四方を隈（くま）なくうかがい始めました。

谷間から遠く低く平地へかけて、ぼーっともやがかかっていまして、その間から方々に、高い山の頂がそびえ立って、きらきらと日に照らされています。

するうちに、いつのまにか、日の光が隠れてしまって、今まで低い麓（ふもと）の方にしか出たことのないまっ黒な夕立雲が、驚くほど高く空の上に出てきて、むくむくとふくれ広がってきました。

「雷（らい）の神がいよいよやり始めたな」

そう思って禿鷹（はげたか）は、眼を皿のように見開いてうかがっていました。

夕立雲はますます大きく濃くなって、見る見る内に空を隠してゆき大粒の雨がぽつりぽつり落ちてきて、天地がまっ暗な闇に包まれてしまいました。

「さあもうじきだぞ」

そして禿鷹はさらに眼を見張りましたが　岩の［＃「見張りましたが　岩の」はママ］影からではよく見えないので、その山の頂の一番高い岩の上に飛び上がって、雨に濡れながら一生懸命になって、どこに雷が落ちるかを見張りました。

　雨はもう大降りになり、天地はなお一層暗くものすごくなり、高い雲の中には雷が鳴り始めました。と思うまに、ぴかっと矢のような光がつっ走って　同時に［＃「つっ走って　同時に」はママ］天地もくずるるばかりの音がして……とまでは覚えていましたが、それきり禿鷹（はげたか）はあっというまもなく、息が絶えてしまいまし

た。

禿鷹が上っていた山こそ国中で一番高い山で、そこに雷の神が雷を落としたものですから、頂上の岩の上にいた禿鷹は、それに打たれて、黒焦げになって死んでしまったのです。

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社
１９９０（平成２）年11月27日第1刷発行
入力：kompass
校正：門田裕志、小林繁雄
２００６年４月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。